

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成21年度:65～66.

小児の発達段階と転倒・転落に関する要因と対策

武田都子、川合二美子、加藤真希、澤田みどり

小児の発達段階と転倒・転落に関する要因と対策

4階西ナーステーション ○武田 都子、川合二美子、加藤 真希、澤田みどり

キーワード：小児 発達段階 転倒・転落

【はじめに】

小児は、発達段階の特徴から危険予知能力の低さ、環境の変化から転倒・転落の危険性が高い。A病院小児科病棟においても、付き添い者が側にいる状態での幼児期のベットからの転落や廊下での転倒が多い。入院時には、付き添い者に口頭で転倒・転落予防策の指導を行ってきた。さらに、転倒・転落パンフレットを作成し、指導の強化にあたってきたが、一時的な効果にとどまっていた。そこで、過去3年間の転倒・転落に関する要因と発達段階の関係性を分析し、新たな具体策を検討したので報告する。

【研究方法】

1. 調査期間：平成20年4月～平成21年3月
2. 調査対象：2006年から2008年のA病院小児科病棟で発生した、転倒・転落インシデントレポート63件。
3. 調査方法：インシデントレポートから、性別・発達段階・疾患・場所・目的・インシデントレベルに分類。
4. 分析方法：6項目を、統計ソフトSPSS Ver.11を用い、Kruskal-Wallis検定にて関係性を分析し検討を行った。
5. 倫理的配慮：看護部の承認を得たのち、守秘義務の遵守を理解のうえ、インシデントレポートは全てをコード化し、処理にあたった。

【結果】

発達段階では幼児期が70%、疾患別では長期の安静制限を強いられる血液・心疾患が40%、場所は60%が病室、目的は柵の上げ忘れや椅子からの転落、筋力低下による転倒など目的不詳が70%、歩く、走るなどの目的が30%。性別は男児60%、女児40%。インシデントレベルは2（処置はせず、状態観察のみ）が70%であった。

表1 患児の発達段階との関係

	平均値±SD	P
発達段階	2.24 ± 0.56	
疾患	3.90 ± 3.38	0.674
場所	1.67 ± 1.04	0.380
目的	4.24 ± 3.09	0.005 **
インシデントレベル	1.83 ± 0.49	0.898

** p < 0.05

Kruskal-Wallis検定では、柵の上げ忘れという目的不詳にのみ有意な差が見られた。（表1）

【考察】

小児の特徴として、自分では危険から身を守る事は難しく、「小児が入院生活を安全に過ごすためには、看護師だけではなく、側にいる家族の協力が必要不可欠」と、付き添い者の注意と協力の必要性を、加藤¹⁾らは述べている。特に幼児期は、発達段階として歩行開始時期にあたり歩行状態が不安定。さらに周囲の環境に関して興味を示し始める時期で注意力に乏しく突発的な行動が多く、転倒・転落をはじめ危険のリスクは高い状況におかれる。

成人の転倒・転落において平野²⁾らは、「患者がトイレに行こうとする自力行動が転倒・転落の第一要因」と述べている。成人は夜間の排泄行動など目的的に行動する際の転倒・転落が多く、看護師の介入により転倒・転落はある程度防止できる。しかし、小児は今回の結果から考えると成人とは異なり、付き添い者の柵の上げ忘れという目的不詳が多く、側にいる付き添い者の協力が必要不可欠という加藤らの先行研究と同様の事がいえる。入院時に、パンフレットを用いて視覚的に付き添い者に安全対策の予防を指導しているが、状態の急激な悪化による入院時には、付き添い者は動揺し、余裕がない状況にある場合が多い。その様な付き添い者の精神状況を考えると、看護師の定期的な柵の使用状況の確認と更なる指導強化が看護介入として重要と考える。

【結論】

1. 小児の発達段階と転倒・転落の関係には、柵の上げ忘れという目的不詳の要因があげられた。
2. 対策として、付き添い者への安全対策、特に柵の使

用について看護師の定期的な確認とパンフレットを用いた指導の強化が必要である。

【おわりに】

今後の課題として、今回の分析で結果は得られなかったが、血液・心疾患にも転倒・転落が多い。これらの原因として長期安静や行動制限による、筋力の低下が考えられる。現在、病棟保育士と協働し、筋力アップのためのアンパンマン体操やリハビリを実践中であり、今後この成果の検討をしていく。

【引用文献】

- 1) 加藤純子・石川洋美：小児病棟における転倒・転落予防，医療の質・安全学会誌，1(1)，P126，2006.
- 2) 平野順子他：転倒・転落発生の実態調査に基づく新たなアセスメントスコアシート開発の試み，第36回日本看護学会論文集（成人看護Ⅰ），P113～115，2005.